

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19500636

研究課題名（和文）丹後半島の日常生活に今も残るマイナーサブシステム（遊び仕事）の自然共生的価値

研究課題名（英文）The value of symbiosis between man and nature through Minor Subsistence which embedded into the daily life in Tango

研究代表者

三橋 俊雄 (Mitsuhashi Toshio)

京都府立大学・生命環境科学研究科・教授

研究者番号：60239291

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、丹後半島の日常生活に今も残り実践されているマイナーサブシステム（遊び仕事）に着目し、1) その生活文化的・生活技術的価値を探求していく地域・生活デザイン学や道具・民具学、2) その価値を保全していくための里山保全再生学・景観生態学、そして、3) その「遊び」を可能とする地域生活・地域空間全体が生きた博物館であるためのエコミュージアム学などの視角から学際的にアプローチし、マイナーサブシステムが内包する自然共生的価値を見出すことにある。

加えて、今まさに途絶えようとしている伝統的生活文化としてのマイナーサブシステムを、里山の保全活動や自然と交わり遊ぶ体験学習の推進や、各種のメディア発信を通して、地域活性化や臨地環境教育に広く結びつくかたちで、保全・継承・再構築していくことを目指すものである。

結果として、遊び仕事の自然共生的価値について、以下を明らかにした。

- 1) 「遊び仕事」は、人間行動の本質である「遊び」を通して、自らが自然共生を学ぶ手立てとなり得る。
- 2) 「遊び仕事」は、自然と人間が対等に向き合える「等身大」の共生の場を有している。
- 3) 「遊び仕事」は、生活や自然の現場で、生活技術を学ぶことができる「臨地」自然共生教育である。
- 4) 「遊び仕事」は、今日の情報化・バーチャルな社会環境において、自然共生のための「体験知」教育を学ぶことができる。
- 5) 「遊び仕事」は、自然を学び、自然と遊ぶ、「豊かな自然共生型ライフスタイル」を創出・実現することができる。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to explore the Minor Subsistence existing in daily life (which can be called Play/Working) of Tango area. 1) In this concept of life culture the search is conducted on Value of Human Life and Technology through life design knowledge, living artistic, craft knowledge, and tools of the place (Dougology). 2) In order to protect these values the preservation and revitalization of knowledge, the ecological scenery, of Satoyama (border zone between mountainous and arable zone) is necessary. 3) The possibility for this play of living culture of the place can be understand as an approach from eco-museum to inter-disciplinary knowledge of playing being part of integral life through the whole meaning of Minor Subsistence.

Furthermore, this cope the problem of disappearance of traditional life culture by taking the Minor Subsistence as medium of preserving the Satoyama (border zone between mountain and arable area) life style, or the intersection with natural environment, by promoting learning of playing experience. The objective is to establish wide link between these issues through various media on preservation inheritance, rediscovery.

As a result we could clarify following issues on the value of symbiosis between man and nature through Minor Subsistence.

- 1) Minor Subsistence is an expression of the basic instinct of human being and represents ways of learning the cohabitation with natural environment.

- 2) Minor Subsistence as mean of interaction between human and natural environment represents a whole life picture for cohabitation.
- 3) Minor Subsistence is an expression leading to the learning of life technology in life and natural environment basis.
- 4) Minor Subsistence is a way of learning for cohabitation with natural environment (experience knowledge) of today information system, virtual social environment .
- 5) Minor Subsistence is way to learn the nature to play with environment (Through this process Life style of Prosperous cohabitation with nature is possible.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：地域デザイン学

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：マイナーサブシステンス、遊び仕事、自然共生、生活文化

1. 研究開始当初の背景

1992年のリオデジャネイロで開かれた「環境と開発に関する国連会議」において「持続可能な発展」(sustainable development) (注1)が提起され、それを契機として、自然共生型のライフスタイルを志向すべき、さまざまな研究がすすめられてきた。

その一環として、環境倫理学や現代民俗学等の視点から、鬼頭(注2)や松井(注3)、篠原(注4)らが「マイナーサブシステンス(遊び仕事)」という概念を提唱しはじめた(注5)。

そこでは、人間と自然の関係における基本的な営みとしての「遊び」を、主たる生業ではなく、経済的にはそれほどカウントされなくてもその地域の人びとの営みとして重要な意味をもつ「マイナーサブシステンス(遊び仕事)」として捉え、その今日的な意味を、われわれ人類が備えるべき自然との共生の視角から考究しようとした。

例えば、海でのタコ・イカ釣り、川でのウナギ・サケ捕り、山での山菜採りなどを、「生業」と「遊び」が相交わる場面において自然と人間がつながる「営み」として、そこに自然共生型ライフスタイルのあり方を発見し、その重要性を提示した。

一方、筆者は、地域の伝統的生活文化を基軸として、内発的地域づくり(注6)や自然共生(注7)の視点から、過疎化高齢化地域の自然的・生活文化的資源を活用した地域活

性化に関する研究、ならびに、人間の自然共生的な行動と観念についての研究を行ってきた。また、1998年より、丹後半島の農山漁村において「野に出て生活を学ぶ」臨地環境教育を実践し(注8、9)、現在までに延べ600名の学生を学外演習に参加させてきた。この臨地環境教育の実践を通して、地域の自然共生につながるライフスタイルのあり方や、都会では得られない自然とともにある暮らしの「豊かさ」、生物・文化多様性の「恵み」に触れ、日常生活における「自然共生型生活行動の実践」について、その重要性を痛感してきた。

また、筆者は、丹後の農山漁村において、子どもの「遊び」から大人の「遊び仕事」へ、そして「生業」へと続く、自然共生的な営みであり生活文化である「遊びの連続性」について、前述の臨地環境教育のなかから発見・学習するなかで、マイナーサブシステンス概念と出会い、まさに、今日の社会が、二十一世紀の自然共生型ライフスタイルの探求に向けて学ぶべき課題の一つがその概念に内包されていると確信し、さらに、マイナーサブシステンスの視点から、地域の「自然や生活文化の豊かさ」を見直し、その価値をエコミュージアムとして活かすことにより、過疎化高齢化が進行する当該地域の伝統的生活文化の継承・保全と地域活性化に役立つものと考え、本研究を推進するに至った(注10)。

2. 研究の目的

本研究の目的は、丹後半島の日常生活に今も残り実践されているマイナーサブシステム（遊び仕事）に着目し、1) その生活文化的・生活技術的価値を探求していく地域・生活デザイン学や道具・民具学、2) その価値を保全していくための里山保全再生学・景観生態学、そして、3) その「遊び」を可能とする地域生活・地域空間全体が生きた博物館であるためのエコミュージアム学などの視角から学際的にアプローチし、マイナーサブシステムが内包する自然共生的価値を見出すことにある。

加えて、今まさに途絶えようとしている伝統的生活文化としてのマイナーサブシステムを、里山の保全活動や自然と交わり遊ぶ体験学習の推進、インターネット等のメディア発信を通して、地域活性化や臨地環境教育に広く結びつくかたちで、保全・継承・再構築していくことを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、京都府宮津市の、1) 養老地区、2) 上世屋地区、3) 由良地区、ならびに、4) 京都府南丹市美山町大野地区、5) 新潟県村上市山北地区における農山漁村を調査対象フィールドとした。

4. 研究成果

筆者らは、前述した農山漁村における調査フィールドにおいて、タコ釣り、イカ釣り、刺し網、ハマチ（スナガニ）捕り、ウサギ捕り、川魚捕り（ニゴリスクイ）、鮭捕り（コド漁）、山菜採り、焼き畑、ジネンジョ掘り、畑づくりなどのマイナーサブシステム（遊び仕事）について、体験や聞き取り調査により、事例採集した。以下に、1) タコ釣り（京都府宮津市養老地区）、2) イカ釣り「いかつけ」（京都府宮津市養老地区）、3) ウサギ捕り「くくりわな」（京都府宮津市由良地区、京都府南丹市大野地区）、4) ウサギ捕り「パイ投げ」（京都府宮津市上世屋地区）、5) にごりすくい（京都府宮津市由良地区、京都府南丹市大野地区）、6) 川魚捕り「コド漁」（新潟県村上市山北地区）について報告する。

(1) タコ釣り

「食いたいな」と思ったらとりに行く。堤防から眺め、穴に入ってじっとしているタコを探す。竹や糸の先にバカシ（ルアー）をつけてタコの居場所を探し当てる人もいるが、タコは吸盤を外に出して穴に入っているので何も使わなくても見つけやすい。

穴からタコをおびき寄せるには、バカシを見せる場所が重要。もともと穴から出ている場合は頭がゆらゆら揺れているのですぐ分かるが、タコがどこにいたとしても、タコ釣

りをする時は、海が鏡のように平らに穏やかで、底まで見えることが条件だという。

雨あがりには、タコが移動して止まった瞬間、なぜかまっ白に体の色が変わる。加えて雨あがりには海も穏やかなので、タコ釣りの絶好のチャンス。雨あがりに急いで堤防に行き、タコを探す。タコ釣りの季節は4、5月から10月まで。10月を過ぎるとマダコを食べるミズダコが沖から堤防のあたりまでやってくるため、マダコが逆に沖のほうに住み替え、捕れなくなる。（京都府宮津市養老地区住民から聞き取り。）

(2) イカ釣り「いかつけ」

アオリイカなら9月中旬から11月に、タルイカなら10月から12月に行う。道具は竿とビシ（おもり）のついた糸、バカシ（ルアー）。船で釣るとイカの真上まで近づけるのでとりやすい。夜に釣りにいく場合は「いかつけ」と呼ぶ。夕方から夜の12時ごろまで釣る。

明るく、海の透明度も高い満月の夜は、バカシがよく光るため、イカがよく釣れる。一晩で胴20センチくらいのを100杯ほど捕る人もいる。捕ったイカは刺身やスルメにして家族で食べたり、人に分ける。食べる楽しみよりもイカを釣る楽しみの方が大きい。船に子どもを乗せていき、そこで櫓のこぎ方を教えたし、自分もそうやって教えてもらって覚えてきた。（京都府宮津市養老地区住民からの聞き取り。）

(3) ウサギ捕り「くくりわな」

杉の新芽をウサギが食べるので、ケモノミチに針金で「輪」を作り、仕掛けた。昔は圧倒的にウサギの害が多かった。食料のない時代でもあり、料理して食べた。昭和17年くらいから終戦までおこなった。1日に7羽もとれて近所に分けたこともある。10月から翌年の4月まで。5日に1羽くらい。7～10カ所。ケモノミチに1～2カ所仕掛けておく。ヒサカキの葉を落としたり、丸い糞を落としていてわかる。

技術は大人から教わった。山仕事の道中で、毎日見に行く。朝捕って、山仕事中は、木にぶら下げておいた。ネズミ色した野ウサギである。針金の罠は使い捨てである。ウサギの皮は、のどから足まできれいに剥ける。皮はなめさず、干して、山のシキモノにした。内臓もうまくとれ捨ててしまう。背や足の肉をすき焼きにして食べる。佃煮風に「ころ炊き」にすると日持ちする。

針金は、藁で一度焼いて、粘りを出して柔らかくして使った。金の匂いが取れるためか、よく捕れた。木を地面に刺して、ワナをつけることもある。ウサギが木ごと逃げたこともある。広場、草地から林に入るところに仕掛

けた。

冬場、雪が固まったら捕りにいく。罾を直しに行くこともある。杉の春秋植えて、大変な思いをして苗木を植えたのに、新芽を食べられ、翌年植えて直した。杉の木が1本でも助かると思い、仇討ちのつもりで捕った。楽しみだった。朝7時半に出発、道中仕掛けを見て、谷で仲間と仕事をし、4時半に帰る。また、山への行きしなに仕掛ける。昨日の場所には仕掛けない。(京都府宮津市由良地区、京都府南丹市大野地区住民からの聞き取りをまとめたもので、現在は行われていない。)

(4)ウサギ捕り「バイ投げ」

「バイ投げ」では、まず、斜面の日の当る曲がった木の根元近くに眠っているノウサギを探し出す。そして、ウサギに気づかれないように近づいて、バイ(二股の木にアカマツの葉をくくりつけたもの)を用意し、天敵のタカやトンビが襲いかかってきたかと思わせるように続けざまにバイを空中に投げ上げる。バイは、ヒューヒューと風を切つてうなり声を発する。その音に驚いて、ノウサギは身をひるがえして木の根元の隠れ穴に一目散に逃げ込む。間髪いれず雪穴めがけて走り寄り、すばやく周辺を踏みつけて逃げ道をふさぐ。

テンズキ(木製の除雪具)で、穴を慎重に掘り進み、ノウサギの後ろ足を探りだし、両足を掴んで引っ張り出す。

このバイナゲは午前10時から午後3時くらいまで、節分までが猟期にあたる。節分を過ぎるとウサギは発情期を迎え、敏感に行動するために追いかけるのが難しくなるという。(京都府宮津市上世屋地区住民からの聞き取り。)

(5)にぎりすくい

由良川が大雨で濁ったとき、水中の酸素不足で魚がふらふらし、よどみに集まってきたところを、タモで流れの上から下に向かってすくい、ぐるっと岸に寄せてあげる漁法。アユもコイもウナギもいっぺんに捕れたらこんなおもしろい漁はないという。戦後30~40年頃まではやっていたが、しばらくして禁止になった。

タモは、杉の枝をうまく曲げて、直径数ミリのしなやかな枝先を両方から重ねあわせて糸で縛って輪を作る。柄の長さは、4メートルほど。自然の造形を合理的に利用したブリコラージュ(注12)といえる。網の部分は絹糸を使用して女性たちが編み、毎年柿渋につけては干し、補強した。(京都府宮津市由良地区、京都府南丹市大野地区住民からの聞き取りをまとめた。)

(6)川魚捕り「コド漁」

コド漁とは、サケの遡上流に「コド」と呼ばれる仕掛けを設置して行われる越後地方の伝統的な漁法である。「コド」は、川の流れをよく考えて川底に杭を打ち、その杭に竹や杉の皮、ヨシ、柳などを取りつけて、サケが休息したりする箱型をした装置で、コドに入ってきた鮭を「ミマド」から覗きながら「カキマド」に鉤を差し込んでサケをひっかけて捕獲する。現在では、やや簡略化された「コド」の仕掛けも使われている。

全国で伝統的な漁法が次から次へと消えてしまっている中で、この山北地区大川のコド漁は、鮭の習性を利用した、先人の知恵がうかがえる貴重な漁法である。(注13)(新潟県村上市山北地区住民からの聞き取りと資料からまとめた。)

(7)マイナーサブシステム(遊び仕事)にみる集落共同体規範

表1は、宮津市養老地区のM氏の遊び仕事暦を筆者がまとめたものである。1月から12月まで、一年を通していかに海山の自然に触れ、楽しみ、自然共生としてのマイナーサブシステム(遊び仕事)をライフスタイルとして享受しているかが分かる。また、上述の事例からも、海山の大自然に対して各個人がいかに多様で豊かな遊び仕事を生みだしてきたかが推察できる。そして、そのマイナーサブシステム(遊び仕事)を成り立たせるだけの十分な自然、豊かな自然が守られてきたことも必要条件であろう。

表1 M氏の遊び仕事暦

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アワビ漁 *				>								<
サザエ漁 *	<											>
テングサ *							<>	2~3週で終わり				
ウゴ漁 *							<>	2~3週で終わり				
ウニ漁			潜水漁									
モズク漁 *				<>	4月中旬~5月上旬							
アゴ(トビウオ)漁 *					<	>	5月中旬から6月いっぱい					
マタコ・ミズダコ漁 *	<	ミズダコ	>	マダコ	(6~9月は堤防や磯からもとれる)							
海												
刺し網漁 *	<カワハギ、グレ、イシガキダイ、ガシラ、アコウ、シマイサキ、サニゴ、メバル>											
ワカメ漁 *												
ワカメ漁 *												
モンドリ漁(タコ捕り)												
秋イカ釣り *												
カマス釣り *												
ワタリガニ												
アマダイ、レンコダイ												
ホウボウ、マダイ、キダイ												
陸												
ワサビ(根)												
ワサビ(葉)												
フキノトウ												
葉サシヨ												
タラの芽												
コシアブラ												
タカノツメ												
ワラビ												
ササユリ(花)												
アケビ												
ジノンジョ												
柿刈り、オオミノ												

■ 解禁日あり * 皆がやっている

また、その自然を守ってきた地域共同体の「掟」の存在も見て取れる。*印は、集落のみんながやっている遊び仕事である。そこでは、「山の口開け（解禁日）」や海山での採集のルールなど、自然との共生を維持するための集落共同体的規範が守られてきた。*印以外は、M氏が個人的に実践している遊び仕事である。

◎まとめ

(1) 遊び仕事の自然共生的価値

本研究では、海山川の自然の中で、大人たちが胸おどらせながら、身体を媒介として獲物などを捕獲する行為を、経済的には副次的な生業であり、遊びの色彩が強く、伝統的で高度な技法(skill)を有し、その遊びが喜びと誇りの源泉になり得る「マイナーサブシステム（遊び仕事）」であることを示し、その「遊び仕事」が、地域の「自然や生活文化の豊かさ」を再認識し、その価値をエコミュージアムとして活かすことにより、地域の伝統的生活文化の継承・保全、並びに地域活性化につながるものと考え、論考を進めてきた。

その作業の中で、筆者は、遊び仕事の自然共生的価値について、以下のように捉えた。

- 1) 「遊び仕事」は、人間行動の本質である「遊び」を通して、自らが自然共生を学ぶ手立てとなり得る
- 2) 「遊び仕事」は、自然と人間が対等に向き合える「等身大」の共生の場を有している。
- 3) 「遊び仕事」は、生活や自然の現場で、生活技術を学ぶことができる「臨地」自然共生教育である。
- 4) 「遊び仕事」は、今日の情報化・バーチャルな社会環境において、自然共生のための「体験知」教育を学ぶことができる。
- 5) 「遊び仕事」は、自然を学び、自然と遊ぶ、「豊かな自然共生型ライフスタイル」を創出・実現することができる。

(2) 遊び-遊び仕事-生業へと続く自然共生

幼児期に「遊び」を通して得た自然に関する知識、自然と付き合う能力は、やがて子どもの「遊び」から大人の遊びへ、素手の技による自然との共生の姿「マイナーサブシステム（遊び仕事）」へと連続的に移行していく。いまだ当該地域で行われている「遊び仕事」は、生業活動の傍らにあって、経済的には副次的であっても、担い手は情熱をもって、また誇りをもって取り組むことのできる行為であり、人間と自然との関わりのなかで、「生業」とは異なる重要な意味をもつ営みであることが見て取れた。

素手の技で自然に立ち向かい、自然と共生してきた「遊び仕事」は、一方で厳しい自然と対峙しながら、いわば機械の技をもってそ

の自然を克服してきた「生業」へと分化していく（図1）。

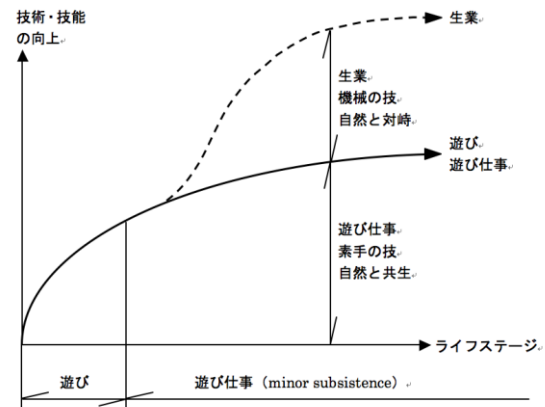


図1 遊び-遊び仕事-生業の連続性

「遊び、遊び仕事」は、人間が自然の一部であり続けながら、自然との「闘い・ゲーム」のなかで、いかに自然と共存・共生していくかの、大切な営みであった。また、「遊び、遊び仕事」は、「大人になってもずっと遊んでいたい」という住民の声にもあるように、自然と共にあり続ける生活の豊かさ、すばらしさを探求する人間の姿であり、その「遊び、遊び仕事」を可能にさせてきたものが、まさに、地域の豊かな自然、豊かな生活文化に他ならない。

「遊び」「遊び仕事」「生業」は、人間の一生において断続的なものではなく、人間の成長とともに、生活における比率や技術・技能的段階を変えながら、一連の流れとして存在し、進化し続けてきたものである。

そうした「遊び」「遊び仕事」「生業」のとりえ方こそ、地域における生活の豊かさ、自然の豊かさを理解し、その豊かさを形成・維持していくための不可欠な視点であると考えられる。また、「遊び仕事」の探求が、自然と乖離した現代生活の修復・回帰、ならびに、丹後半島の豊かな生活文化・自然・生態系の保全につながる、自然共生的価値として有効に機能するものと考えられる。

「遊び仕事」こそ、楽しみを基本として、等身大で自然に働きかけることができる生活文化であり、現代日本人をして自然共生志向の生活観・自然観を抱かせ、自然共生型ライフスタイルを体現化させる「ブレークスルー」になり得る研究対象であると考えられる。

注

(1) 1987年のブルントラント委員会最終報告書「Our Common Future」における「持続可能な開発：将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことがない形で、現在の世代のニーズも満足させるような開発」が発端となって

いる。『環境・循環型社会白書平成20年版』による。

(2) 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす』ちくま新書、1996。

(3) 松井健『自然観の人類学』榕樹書林、2000。

(4) 篠原徹『民俗の技術』朝倉書店、1998。

(5) その他、マイナーサブシステムに関する書籍としては、鬼頭秀一「環境の豊かさをもとめて—理念と運動」、鬼頭秀一編『講座・人間と環境第12巻』、1999や、農文協『山・川・海の「遊び仕事」』現代農業8月増刊号、2006などがある。

(6) 三橋俊雄（共著）「内発的地域開発計画の特質—過疎地域・新潟県山北町における実践を通して」デザイン学研究 No. 80、43-50、1990。

(7) 三橋俊雄（共著）「ものづくりを通じた自然と人間の共生に関する行動と観念—福島県三島町の自然に働きかけるものづくりの実態調査を通して」デザイン学研究 No. 113、71-80、1996。

(8) 三橋俊雄「エコツーリズムと内発的地域づくり—地域の光をデザインする」『丹後地域文化オープンカレッジ』、地域情報研究シリーズ2、古今書院、1-16、2001。

(9) 京都府立大学・全学教養教育科目として、「環境共生教育演習Ⅰ・Ⅱ」が、2008年度より開講され、文学部・公共政策学部・生命環境学部の10名の教員により、講義・学外演習が実施されている。

(10) 平成19-21年度科学研究費補助金研究「丹後半島の日常生活に今も残るマイナーサブシステム（遊び仕事）の自然共生的価値」（研究代表者：三橋俊雄）。

(11) 松井健『マイナーサブシステムの世界』篠原徹（編）、民俗の技術、朝倉書店、247-254、1998より抽出・加筆した。）

(12) 人間は、生活に必要な道具を、身の回りの自然物を利用してつくるとき、その道具のもつ形態的・構造的性質をイメージしながら、それに見合った自然物、たとえば、あるかたちをした木の枝や石などを採集する。そこでは、自然物を人間が必要としている道具に見立て、その形状や構造を最大限に活かして目的にかなった道具につくりあげていく「ブリコラージュ (Bricolage)」というものづくりの手法を見ることができる。

(13) 三橋俊雄（共著）「町の「光」を観る」『住民活動』季刊 No. 60、財団法人 明日の日本を創る協会、30-37、1989。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計2件）

① 三橋俊雄、マイナーサブシステム（遊び仕事）とエコミュージアム、エコミュージアム研究 No. 15、日本エコミュージアム研究会、2010、pp. 39-46（査読有）

② 三橋俊雄、Minor Subsistence and Ecomuseum、韓国・地域文化デザイン国際シンポジウム、2009（査読有）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

○取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://kankyokyoiku.web.infoseek.co.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三橋 俊雄 (Mitsuhashi Toshio)

京都府立大学・生命環境科学研究科・教授
研究者番号：60239291

(2) 研究分担者

町田 玲子 (Machida Reiko)

京都府立大学・人間環境学部・名誉教授
研究者番号：10046493

田中 和博 (Tanaka Kazuhiro)

京都府立大学・生命環境科学研究科・教授
研究者番号：70155117

南出 隆久 (Minamide Takahisa)

京都府立大学・人間環境学部・名誉教授
研究者番号：60081551

深町 加津枝 (Fukamachi Katsue)

京都大学・地球環境学堂・准教授
研究者番号：20353831

面矢 慎介 (Omoya Shinsuke)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：80275180